初期浮世草子

中島　隆　編

古典文庫

初期浮世草子

一

中島　隆　編

古典文庫

古典文庫第五四九冊

平成四年八月二十日印刷発行　　非売品

初期浮世草子
一

編者　中島　隆
発行者　吉田幸一
印刷者　共立印刷株式会社

発行所　114
東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二
電話（三九一〇）二七一七
振替口座東京九―一四五九七番
古典文庫

© KOTEN BUNKO 1992. Printed in Japan

目次

凡例……三
けいせい請状　元禄十四年刊
京の巻　傾城請状　上……五
大坂の巻　傾城請状　中……一三七
江戸の巻　傾城請状　下……二六九
解説……三八七

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

凡例

一、本書には元禄末期の浮世草子㈠として、『けいせい請状』早稲田大学図書館蔵を収めた。

一、本文は底本通りに翻刻することを原則としたが、次のような点を配慮した。

1、漢字は原則として新字体を用いた。異体字は通行字体に改め、漢字にふられた濁点は省略した。ただし、「貝」は原文どおり翻字した。

2、仮名遣いや振り仮名は原文のままとしたが、原文の「ミ」「ハ」「ニ」などの表記は平仮名に直した。また「より」「こと」「さま」などの合字は、二字に分けて記した。

3、清濁・畳字・句点は、すべて底本のままにした。ただし、句点の・は。に統一した。浄瑠璃詞章のゴマ点は省略した。

4、誤字・あて字等は原文どおりに翻字した。ただし、人名の「右衛門」を「右門」と誤刻する場合は「右衛門」に統一した。また『けいせい請状』江戸の巻には腰元の名が「おくや」「おつや」の両方に表記されるが、原文のまま翻字した。

5、底本の丁移りは、版心に施された丁付によって、その丁数を記した。オ・ウは表・裏の略号。組版の都合上、丁毎に改行した。

6、底本の破れ、印刷不鮮明、虫喰いによる不明箇所は、出来るだけ他本と校合の上補ったが、底本が孤本の場合には、□とし、「ムシ」「カスレ」等その理由を傍書した。推定できる文字は□のなかに記した。

一、底本の序文・挿絵・刊記等は、所定の位置の組版近くに挿入した。

翻刻・校合にあたり、御高配を得た東京大学総合図書館・早稲田大学図書館に深謝申し上げる。早稲田大学図書館蔵資料使用許可三二―一六六号

京

恋をおり出す（以下破損）

傾城請状　上

町中にてこれさ（以下破損）

近松門左衛門作

けいせい請状目録　京之巻

都の花役者より／さきかけてかついろ見せたる／梅はちの定もん
けいせいかひの／あんばいには／たれも津を引男

㊤ひよくをしこむ枕箱

ちはがかうじて跡の／まつりのねり物
糸によるいかのぼりにうつゝぬかして／上は有頂天神

㊥恋と情の二軒茶屋

和光同塵は一むらしげる／薄がくれ

きほひをくれは臥猪(ふすい)の床(とこ)／すたるまいは是

(下)松がしらふる三味線

はらももえたつ／ひりんずのしたぎ

出所が七百両入の／分別(ふんべつ)ぶくろ

其跡が目出度事ぞろへ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

団扇曽我（だんせんそが）

けいせい請状
宇治嘉大夫正本

地色ハル
もとよりうけでうあらばこそ。くはいちうよりげかきしかけしふもん
ぼんをとり出し。うけでうとなづけたからかにこそよみたりけれ。
地色中ウ
けいせいぼうこううけでうのこと。一此なみと申むすめながれのみち
に身をしづむときにけんきう四ねんみづのとのうし。五月十五やつき
出しぢよらう。いづくのくもゝさはりなきかげもまるどし十ねんきつ
て。きんす百りやうたしかに。手どりの身はかごのとり（二才）おやは
たこくのしにめなりともねんのあひだはくるわのほかへ。一あしにて
も。ふみもかよはぬをんごくはたうへ。うりてやり手やあね女らうの

第1図（上3オ）

をきて。そむかずつとめさせもがつ（ウ フシ）ゆほども。ほうこうにじよさいなく。（中）きやくをばふらずこゝろにかけ（ウ）てまはるもん日を。一日もをこたら（キンハルフシ）せ申まじ。だい一にはまぶぐるひ。うきなほくろに入じやうねする。おとこあつて。つとめそまつにいたすにをいてはきのまゝながらのはしにおろされ。又はみづ（二ウ）しの下女にせられ。かまのひをたきゆどのゝみづ。かどはきせどはき。にはのさ（フシ）（キン 中）

うじのちりやあくたやかみくずのはのうらみと。ぞんじ候まじ。万一
このものねんのうち。くるわをにげて

挿絵／第1図（三オ）

はしりゐのみづに。身をなげやいばにふし。しんぢうしてしゝたりと
も御なんはかけじいづかたまでも。うけにんいでゝさばきがみ。（三オ）
あぶらもとゆひべにはながみ。あしだせきだにいたるまで。しきせの
ほかは身のいれたてとのさだめなり。もしまたふかきえんのありこ
ひぞ。つもりてみなの川。さそふみづとてうけいだす。あたひせんき
んまんきんなりともそれはしゆじんのとくぶんたるべしもしたれ人ぞ
ながれの身に。よこなみかけてさまたげのさし出のいその（三ウ）もか
りぶね。をしていとまをとるならばいしやうのこらずはぎずゝき

のほうこうかまひたまふべし。そうじてつとめの其あひだげこなりとてもさけのみならひ。ふみにはうそをかきならひ。とこにて人をやきならひねふたきとてもいねふらず。なきたうなくともきぬ〳〵の。わかれにをさへてなかすへし(四オ)。きしやうせいしに身のうちのちをばおしませ申まじ。ゆびはきりぞんかみもきりぞん申ぶん候まじ。其ほかなにはのよしあしにつきごにちのためのけいせいぼうこううけでう。よつてくだんのごとしとてんもひゞけとよみたてたり

▲右かたりまし た請状が座敷狂言のはじまり左様にお心得なされませうとうざい〳〵(四ウ)

第一　けいせい請状座敷狂言

生れ性は三世相にも見あたらぬ
金性水大臣

史記列伝に。李斯二世皇帝をいさめて曰。采椽（ママ）けづらす。茅茨きらずと云しは。唐の堯の御代の。をさまりしためしのよし。是は李斯がいひぶんせきせばし。今の御代から是を引合て見れば。それはじだらくなる家づくり。今は辻々小路〳〵迄。きれい成のみならず。静謐太平成事。堯の御代にもをとらじと。野に手うち。市にうたふて楽む平安城の遊民に。安楽や楽右衛門とて有しが。親のゆづり銀。何万貫目と書に不及。三ヶ所の金ぐら。封のまゝに請取。世に有程の楽しみ。

せぬといふ事ない内に。(五オ)たゝ好色ほどよい物は有まいと。諸事のあそびのしゆず切て。大こまつしや。三味線の次良左。小哥の四良。浄るりの源太。林太。数百の出入。毎日の大酒。ひるよりらうそくにうつり。葬はいつも。ねいりばなのながめにしぼみ。雪のよも大はだぬいでの酒事。料理人の又助が。夜食の後段は。玉子のふは〳〵のさしみじやと。昼なるねごといふもおかしく。右には美少年。芝居のかほ見せのごとく。それ〳〵の風俗をつくり。左に艶色の女。けいこくのよ見せに似て。紅花おしろいの花をさかせ。足をさすりかたうたせて。上品無上の大々臣。はるか程経て。大さはぎのたゞ中へ。大この六助。同又右をくればせにはせ来。たんなの仰付られの。西方嶋原の

(五ウ)

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton